

カンボジア，プノンペン近郊のメコン川沖積低地におけるボーリングコアの堆積相と放射性炭素年代

Depositional facies and radiocarbon ages of the KS core from the Mekong River lowland near Phnom Penh, Cambodia

田村 亨[1]; 斎藤 文紀[2]; Sieng Sotham[3]; 塚脇 真二[4]

Toru Tamura[1]; Yoshiki Saito[2]; Sotham Sieng[3]; Shinji Tsukawaki[4]

[1] 産総研・地調; [2] (独)産総研・海洋資源環境; [3] カンボジア鉱山省; [4] 金沢大・工・土木建設

[1] GSJ/AIST; [2] MRE, AIST; [3] General Department of Mineral Resources

Department of Geology

Cambodia; [4] Dept.Civil Eng., Kanazawa Univ.

メコンデルタの最大海氾濫期の年代および当時の堆積環境を明らかにするため、カンボジア、プノンペン近郊沖積低地の標高約 7 m の地点で行った、ボーリングコア (KS コア) の堆積相解析と放射性炭素年代測定の結果を報告する。KS コアは、全長 30.7 m で、下位よりユニット A から E が認められる。最下部のユニット A は、高角の斜交葉理を示す河川砂層で、堆積年代は 9.0 ka 以前である。ユニット B は、マッドドレイブを伴う平行葉理や低角の斜交葉理を示す極細粒砂層で、堆積年代は最下部が 9.0 ka、最上部が 7.5 ka である。ユニット C は泥炭と逆級化を示す砂層との互層で、7.5~7.2 ka に形成された。ユニット D は、緑灰色の粘土層で、堆積年代は 7.2~0.7 ka である。最上部のユニット A は、赤茶色の土壌である。ユニット B の厚さは 16.5 m にも及ぶが、潮汐の影響のもとでの堆積を示唆するマッドドレイブを示すことから、完新世の初期における相対海水準の急激な上昇期に堆積した、上方付加型の潮汐堆積物であると解釈される。最大海氾濫期は、このユニットの堆積中であつたと考えられる。ユニット C および D は、海水準が緩やかな上昇から安定に転じる時期の、塩水湿地や氾濫原の堆積物であると解釈される。現在のメコン川において潮汐による塩水の流入が河口から数十 km におよぶことから、KS コアのみから最大海氾濫期の海岸線の位置を正確に決定することは難しい。しかしながら、おそらく当時の海岸線はベトナムとの国境付近よりもカンボジア側にあり、プノンペン付近が潮汐の影響を強く受ける環境であつたということが、今回の潮汐堆積物の発見により明らかになった。